

---

# 氷の王妃

素子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷の王妃

### 【コード】

N4490Z

### 【作者名】

素子

### 【あらすじ】

氷の王妃とあだなされる、泣けない女が泣けるまで。

夢の中で何かを必死に探していたような気がする。気ばかり焦って、でも探し物は見つからなくて、そのうちにずきずきとする痛みを取って代わる。

するりと何かが去っていく気配がした。引き止めたくて必死に手を伸ばしても何も掴み取れない。呼びかける声は水の中のように不明瞭だ。

待つて。お願い、行かないで。私の。

「お目覚めですか」

聞き覚えのある声に見覚えのある景色。ここは寝室で呼びかけた侍女のエルマが目赤くしている。何故日の高いうちから寝台に横たわっているのだろう。

常に情報を得て状況を把握して立ち回ることが染み付いているクリステーナは、いつもと同じように質問しようとした。

そちらに顔を向けて起き上がるうとして、ひどく背中が痛むことに気付く。

「わたくしはどうしたというの？」

「王妃様、昼間に階段から転落なさったのです。それで……」

いいよどみ、涙を流す様子で理解する。すうっと血の気が引いていくのが分かる。寝ていなかったらおそらく倒れていただろう。途端、痛みが耐え難いものになる。同時に下腹部にも違和感を感じた。無意識に上掛けの下で腹部に手をやり、クリステーナは感情をのせない声音で侍医を呼ぶようとエルマに申し付けた。

「ご気分はいかがですか」

「背中と腰が痛むほかは。駄目だったのですね？」

初老の侍医はてきばきと質問をして診察をし、目的にかなった薬を用意していたがクリスティーナの一言でその手を止めた。そして改めて腹部の診察をはじめた。

クリスティーナは黙って身を任せる。診察が終わって手を洗った侍医の目には同情の色がある。それでもきちんとした回答をよこした。

「お気の毒なことです。今回王妃様は腰を強打されました。今後のことは現段階では予測は難しいのです。ただ、何とも申し上げにくいのですが、次に妊娠される可能性は低くなつたかと存じます」

「そう、陛下のお子を流した挙句に今後の妊娠も難しい。そう言うことですね？」

「仰せの通りにございます」

「分かりました。少し、休みます」

寝る前にと痛み止めだけを飲むようにと指示して侍医は寢室を出て行った。

待ちかねたようにエルマが近くにくる。それまでも抑えた嗚咽は聞こえていたが、今は誰はばかることなくぼろぼろと泣いて、握り締めている手巾が随分と重くなっている様子だ。

「王妃様、おいたわしい。あの階段に油が塗ってあったのです。きつと側室の」

「滅多なことは言うのもではなくてよ、エルマ」

「ですが王妃様がお倒れになって大騒ぎしていた最中、私も慌てて階段を下りたのです。その時に足を滑らせました。この目で油が塗られているのを見ました。指でも確認をしたのです」

クリスティーナの頭にその時の様子が浮かび上がる。ようやく気分がよくなり、今を盛りに咲いている花を見ようと庭園に行こうとして、階段を下りていたのは間違いない。

その中ほどで急に足を滑らせたのもだ。あとは一瞬のことで景色がめまぐるしく変わったこと意外は覚えていない。悲鳴すらあげた覚えもなかった。

とっさに手すりを掴もうとしかねわずに、空を切った自分の手だけを妙に覚えている。

「張替えのためにと絨毯をはがしてありました。そうでなければ王妃様が転落なさることもありませんでしたのに」

エルマは悔しさのあまりに身を震わせる。

対するクリスティーナはその情報を組み上げる。であれば準備期間を設けての周到な計画に違いない。王族専用の階段。クリスティーナは妊娠してから中央ではなく端を下りるようになっていた。それを知っていて準備のできる人物。

侍医を買収できなかったから実力行使に出たという線か。城の実務を担当する者に今回の立役者がいる。出自や縁戚などを組み合わせればきつと一人の人物に行き着くはずだ。

直接の指示は側室の令嬢ではなく父親の侯爵だろう。

内心で冷笑が浮かぶ。後ろ盾のない王妃でもそれが子供を産めば影響力は小さくない。お飾りの王妃と安心していたところに今回の妊娠が発表されて、城内に少なくない騒ぎをもたらしたのは承知している。

未来の国王の祖父の立場を得るためになりふり構わずということか。

「陛下は？」

クリスティーナの短い質問に、エルマははっとした顔を見せた。それだけで反応が察せられる。そう、いつものことなのだ。

「王妃様の意識がない間に報告がなされたと聞き及んでおります」

その後は聞かなくても分かる。目覚めたときに侍女のエルマがいなかったこと。それがここでの自分の立場を表しているのだから。

おそらく報告を聞きはした。そして聞き流したのだろう。

そうは思っても何の感慨もわかない。

「陛下には申し訳ないことになったけれど、安堵されたのかしら」

「王妃様っ、そんな」

気色ばんだエルマが続けようとした時に、大勢の人の気配がした。

手を上げてエルマを留める。はっと表情をひきしめた侍女は寝台の側から立ち上がって壁際に下がる。

先触れもなく扉が開いて近衛を従えた国王が入ってきた。近衛を扉の内側に控えさせて、国王一人がまっすぐに寝台を目指し、隅に控えたエルマが先程までいた場所に立つ。

国王は立ったままクリスティーナを見下ろした。

「子を流したそうだな」

「陛下」

「そなたが踵の高い靴を履いていたせいで階段から落ちたというのは本当か？」

冷やかな声とともに、寝台に放り投げられた片方の靴をクリステイーナは見つめた。

子を宿したと知ってからは履かなくなっていた、でも以前は気に入っていた靴だ。他の靴と一緒に衣裳部屋に保管されているはずの靴。

クリステイーナの視線は靴から、国王へと移った。その視線は冷静だった。

「わたくしが履いていたものとは違いますが」

「階段下に転がっていたと報告の者が持ってきた」

内通者に掃除か衣装を担当する侍女が追加された。エルマが口を手を当てている様子から、彼女は内通者からは除外している。

もともと国元から同道した唯一の侍女なのだから、最初から容疑者にも入れてはいないが。

「陛下はどう思われるのですか？」

「事實は、そなたが階段から落ちて私の子を流した、踵の高い靴を残してだ」

「では、そういうことなのでしょう」

クリステイーナを見下ろす国王の表情が険しくなる。肩から腕に力が入り鍛えた体の線がいかつくなる。自分が男であれば殴られているかもしれない、とクリステイーナは感じた。

一瞬の激情を抑え込み国王は己を取り戻した。

「弁解もせぬか。そして泣きもしない。全くそなたには氷の王妃の名称が相応しい」

何をされても言われても表情を変えない。

北国から嫁いだこの色素の薄い王妃は、はじめは近寄りがたさから、そのうちに数々の噂話からいつからか氷の王妃と呼ばれていた。今もその瞳は冴え冴えと国王を見つめている。そこには何の感情も秘めていないように見えた。

用件はそれだけとばかりに国王はきびすを返す。

その背中によく通る声が届いた。

「陛下、子供に関してはお詫び申し上げます」

「もういい」

振り返らずに国王は出て行った。

重い音をたてて扉が閉まるのを待って、クリスティーナは細く長い溜息をついた。

エルマはおいたわしいと側で泣く。しばらく気の済むまで泣かせておいて、クリスティーナはエルマに告げた。

「休みます。薬をこれに」

寝台から起き上がれないので手を貸してもらって枕を何個も重ねて上体を起こし、薬を飲んだ。苦勞しながらゆっくりと体を横たえてクリスティーナは目を閉じる。

エルマはそんな女主人の上掛けを整えた後に退出した。

「泣きもしない、か。泣き方などとうに忘れてしまっているのに」

抑揚なくクリスティーナは呟く。

この期に及んでも泣きもせず取り乱しもしない。できない。

また氷の王妃という名称を補完する出来事が起きたと面白おかしく噂されるのだろうと思っても、何の感慨もない。



空っぽ。身も心も空っぽなのだと言覚する。

小国の王女が嫁いだ先は繁栄著しい、自国と比較すればまだ歴史の浅い国。

完全なる政略の上の婚姻に温かいものは通わなかった。冷えた関係を国王は隠しもせず自国の貴族から側室をめとつた。以降、あからさまではないにしても周囲はよそよそしく、それをよろうための冷静さは、情の無い冷たさと受け取られる。

よつやくできた子供もこんなことになつて。

お腹は平らだったがつわりはあつた。それでここに子供が、国王陛下との子供がいるのだと実感できていたのに、今はお腹の中が空っぽなのだ。

身内にあつたくすぐつたさや温かさは、空虚感と痛みに取つて代わられている。喪失感が大きく考えることすらおぼつかない。

ここに在つたものは消え去つて戻らない。

「ごめんなさい」

何もつかめなかつた手を見ながらぼつりとこぼす。

クリスティーナの謝罪の言葉は誰にも聞かれなかつた。

国王ランドルフは朝から執務に追われていた。午後は隣国の使者と会談した後に城下に足を伸ばす用事もあつて、早い時間から書類と格闘している。疲れも見せず内容ご吟味し、必要なら宰相や補佐官からの助言などを取り入れつつ、ようやく最後の署名を終えた。眉間を指でもみほぐしながら、顔を上げるとちょうど間の悪いところに補佐官が新たな書類を持ってきたようだ。仕事を終えたと思つた瞬間に持つてこられるほど腹立たしいものはない。

ただ、その不機嫌を補佐官にぶつけるわけにもいかないので、ランドルフはその書類を受け取った。

「これは？」

「王妃様のご病状を侍医が報告したものです」

真面目な顔になりランドルフは書類に目を落とした。詳細な報告書は何枚もあり、それにじっくり読んだ後でランドルフはぎし、と椅子に背を預けた。高い天井と精緻な装飾を見上げその目を閉じた。宰相がいぶかしげな声をかけた。

「陛下？ 王妃様のご容態はいかがでしょうか」

あの日以来王妃は寝台から離れることなく療養を続けている。食事も寝台で取っているらしく、側には国からつれて来た侍女が絶えず控えている状態だ。寝室に入れるのはごく限られた人物のみ。

そんな一人である侍医の報告書を宰相に手渡ししながら、ランドルフは告げる。

「まだ少量の出血が続いているらしい。微熱もあるそうだ」

王妃が懐妊して 流産したことはまたたく間に城内に広がった。ランドルフがクリスティーナを迎えて数年、ようやくのことだけに人々は注目し関心をよせていた。側室との間にも子は設けてはおらず、順調にいけば第一子のはずだったのに。

「それは……さぞお辛いことでしょうな」

「どうだろうか。私が行った時はいつもの顔だったぞ」

冷たい人形のような王妃の姿を思い出し皮肉な笑いが浮かぶ。

北国特有の色の白さと色素の薄さで隙なく振舞われると、ひどく人間味が失せているように感じられる。靴を寝台に放り投げて責を問うた時にも、いつもと変わらずに氷河のような薄青い瞳で見つめ、抑揚の無い声で返答した。

子供を亡くしたばかりとはとても思えない感情の起伏のなさだった。

「案外、私の子供など産む気もなかったのかもしれない」

「陛下、そのようなことは……」

「戯言だ」

聞いている者が宰相しかいないから漏らせる本音でもあった。自分にすら亡くした子へのいくばくかの感情はあるのに、当の本人に気配が感じられないことがランドルフの苛立ちを誘っていた。

ただこの手のことは決して本音を漏らしてはならない。様々な思惑や憶測をのせてすぐに話は広がる。国王自らの発言となれば、『事故』が『故意』になりかねない。

王妃本人はどう捉えるか知ったことではないが、仮にも一国の王女であり自分の王妃である。波風は立てる必要は無い。

「陛下、お見舞はなさらないのですか？」

随分と年上の宰相が穏やかな顔で探りを入れてくる。この宰相にかかつては、自分などいつまで経っても頼りない若造のままだろうと思いつながら、聞かれたことには答える。

「……花は贈っている」

それで充分だろうと言外に匂わし、昼食を取るべく執務室を離れる。壮麗な廊下を歩き、階段に目をやる。真新しい絨毯が一分の隙もなく敷き詰められていた。

あの時、階段に絨毯さえ敷いてあればその場でこけるくらいで済んでいたかもしれない。いや、あんな踵の高い靴を履いていたのなら結局は同じことだっただろうか。

絨毯の赤の残像がちらつき、ランドルフの中にさざなみをたてる。

午後の用件は比較的早く済んでランドルフは城へと戻った。夕食までは特別用事もない。空き時間をどうしようと少しばかり悩んだ後で、ふと思いついて王妃の部屋へと赴いた。扉を警護する近衛、控えの間に待機する侍医、壁際に控える侍女たちの前を過ぎて寝室へと立ち入る。

部屋は薄暗かった。側付きの侍女、エルマがランドルフの訪れに立ち上がって礼をとり、場を譲る。

クリスティーナは眠っていた。微熱が続いているとの報告どおり、陶器のような白い頬に薄紅がさしていた。薄い色の金髪はゆるく編んで顔の左側に流してある。

ランドルフは眠るクリスティーナの様子をじっと眺めた。

この生き人形のような王妃が自分の元に来た日を思い出しながら。歴史はあっても小さな北国は当初完全に支配下に置く予定であった。

思いがけず鉱物資源が豊富なことが判明し、その流通加工と原料の供給という相互利益が考慮され同盟に変更された。

その証として、ランドルフとクリスティーナの婚姻がなされたのだ。

どこもかしこも色素の薄いクリスティーナは、淡い色目のドレスに身を包み自国へとやってきた。その硝子のような瞳には何の感情もなく、儀礼的にさしだした手に重ねられた指先さえひどく冷たかった。

人形のような 当初はほめ言葉だったはずの形容は、次第に冷たい印象からむしろ欠点の代名詞に変わっていった。

ランドルフとて政略で迎えたからとはいえ、冷淡に扱うつもりはなかった。華奢な姿態は本当に硝子細工のようで、力を入れれば壊れそうな気がして接し方に戸惑ったのを覚えている。

ただ何をしても、何を話しかけても礼儀は申し分ないが生き生きとした反応がない。贈り物に感謝の言葉は述べるが実感がこもっていないように感じられる。大して嬉しそうでないので、次第に贈る気も失せていく。

話をすれば知識も教養もあるのだが、会話を弾ませようとする意図がない。

少しずつ失望と諦めが大きくなり、なかなか子供にも恵まれなかったので側室を迎えた。それすらも冷ややかに受け流された。

おのおのの寝室の他に共用の寝室があるが、クリスティーナがそこに来るのは子供ができやすいとされる数日のみ。義務でいられても食指がうごくはずもなく、互いに背を向けて広い寝台の端と端で休む始末だ。

つい側室に温もりと慰めを求めてしまっていた。

側室の部屋から深夜赴いて、側室の香水の香りをまとわせたまま寝台にすべりこんでも嫉妬するでもなく、硝子玉のような瞳がゆら

ぐこともない。

義務感から寢室を共にしてようやくの懐妊であったのに最悪の形でぶち壊された。

「……………」

思いがけずクリスティーナが苦しそうな声を上げた。眉がひそめられかぶりをふるように顔が横向けられる。上掛けを握り締めている姿はひどく人間くさい。

珍しいこともあるものだ。とランドルフは興味をそそられた。

やがて閉じていた目蓋が開き、青い瞳がのぞく。いつになく瞳が潤んでいるように思えた。

「どうした、辛いのか？」

ぼんやりと視線をさまよわせてランドルフを認める。徐々に焦点があつてきてクリスティーナはいいえ、と否定した。

「陛下こそどうなされました？」

「見舞いに来たつもりなのだが」

「…………それは、わざわざありがとうございます」

弱っている時でさえ隙を見せない。目覚めればもういつもの、氷の王妃だ。

ランドルフは胸に宿った憐憫の情がすうっと消えていくのを感じた。そしてクリスティーナの発言が決定付けた。

「陛下。花を贈ってくださいるのはありがたいのですが、今は」

「気に入らぬか」

「いいえ、とても綺麗です。ただ、今は花をあまり見たくないの

す

「私が贈ったからだろう。分かった、もう花は贈らぬ」

物をほしがらないクリスティーナも花だけは受け取っていたのだが、それすら迷惑かとランドルフは鼻白む。どこまでも相容れないのかと冷え冷えとした心地でランドルフはきびすをかえした。

食欲はとうに失せた。側室の侯爵令嬢をその足で訪問する。

「まあ、陛下。いらっしやるとは思いませんでした。わたくし、感激です」

突然の訪問にも全身で歓迎の意を表す側室のブレンダに、ささくれ立っていた神経が和らぐ思いがする。夕食をとっていたブレンダに付き合っつて軽くつまみ、酒を飲んで二人きりとなる。

ブレンダがランドルフの胸に顔をすりよせた。

「陛下、このたびのお子様のこと。さぞお辛かったですでしょう。わたくしも考えるだけで悲しくて……」

見るとほろほろと涙をこぼしてランドルフを見上げている。

その目尻に親指をはわせて涙を拭う。

「そなたは優しいな。そなたに子供ができていればよかったのに」

「ああ、陛下。もったいないお言葉です」

すがりついてきたブレンダを腕に抱いて、同じ女でこうも違うかと醒めた思いがぶり返す。今はただこの温かく柔らかい存在に溺れようと、抱きしめる力を強めた。

エルマは目覚めたクリスティーナの背中に枕をあてがって、消化がよいようにと煮込んだスープの皿を手渡した。機械的に数口飲み込んで、クリスティーナは皿を下げさせた。

「陛下のご不興を買ってしまったわ」

美しい花の飾られた花瓶を見つめながらクリスティーナが囁く。

エルマは唇を噛み締めた。クリスティーナが『今は』花を見たくない理由など決まっている。あの日、花を見に庭園に行こうとした自分を責めているのだ。

花は嫌でもあの日のことを思い起こさせる。血も凍るような一瞬と、その後の辛い現実を。

「王妃様ももう少し詳しく理由をおっしゃればよろしいのに」

クリスティーナが王女の頃から側についていたエルマは、つい主従の垣根を越えて本音を漏らしてしまった。

口を清めて再び寝台に横たわったクリスティーナが、困ったように微笑んだ。

この国の人間はほとんど目にするものがない、王妃の微笑は物悲しかった。

「そうできたなら良かったのに」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4490z/>

---

氷の王妃

2011年12月17日07時56分発行